

2004年度 日本家政学会若手の会・関西若手の会合同パネルディスカッション
(第56回日本家政学会)

日 時：2004年8月3日 15:30～17:00
場 所：国立京都国際会館Dルーム
テ ー マ：海外で学ぶ、国内で学ぶ 留学について考える
話題提供者：秋田大学 黒川衣代
岡山県立大学 山下広美
日本学術振興会 深沢太香子
福岡教育大学 堀 雅子(当日不都合につき取止め)
進 行：産業総合研究所 都築和代

(社)日本家政学会若手の会幹事(代表)

食物：湯川夏子・濱西知子
被服：村上かおり・前田亜紀子
住居：都築和代・鈴木佐代
経営：室 雅子・永田晴子

以下、講演者ならびに進行者は、名字で示し、敬称は略させて頂いた。
完全な採録ではなく、言い回しや表現が少々異なる部分もある。

テープ起こし、記録担当：前田亜紀子

=====
都築：今年は「海外で学ぶ・国内で学ぶ」というテーマのもと、パネルディスカッションを企画した。今年度の開催を準備するにあたっては、若手の会で努力してきたが、理事会をはじめ、関西支部、および、国際家政学会からのご支援をいただき、こういった設備の整った広い会場で開催でき、非常に光栄であり、感謝している。

今からのパネルディスカッションでは、多くの方々に集まっていたので、意見の交換や助言など、経験談を披露してくださるパネリストの人たちと一緒に有意義な時間を過ごして討論できるように、積極的な参加を希望している。

今回は、それぞれタイプや特徴が異なる留学経験についてのお話を伺い、今後の参考にしてもらえたらよいと思う。留学をしてみたいが、実際はどうなのか、戻った後はどうなるのか、留学先での生活はどんな様子なのか、などの体験談を聞き、ヒントや勇気をもらいたい。国内留学講演者の急な取り止めにつき、フロアの中で経験された方がおられれば、積極的に披露していただき、意見交換や討論を希望する。講演者にはパワーポイントで約5分のサマリーを作成していただいた。

深沢：文部省学術振興会特別研究員に採用。2003年4月から九州大学大学院芸術工学研究員人間工学研究室、栃原裕先生の研究室に所属(統合前の九州芸工大にあたる)。

研究内容は、着衣系における熱水分移動特性について。主に、低圧低温環境における防護服などの研究を中心に、人体と衣服の温熱生理学を行っている。詳しく言うと、低圧低温という特殊環境において、作業能率を低下させることなく温熱レベルを維持するため、どのような衣服を着用していれば安全に過ごすことができるのか考えるため、低温低圧環境における体温調節を考えたり、私達がどのような衣服を着用したらよいのか、私達の体が衣服を纏った時の熱の伝わり方を調べている。

留学の動機は、海外での研究活動に以前からとても興味があった。また、非常にタイミングも良かった。2003/10～2004/9/30までオランダTNO研究所Human Factor Performance Comfortにて、ゲストリサーチサイエンティストという身分であり、リサーチアシスタントではなく、一人前の研究者として扱われている。日本学術振興会では「海外での研究をしてよい」という規約があり、これを利用して海外での研究を実現

させることができた。

留学先での研究目的は、EU連合運営による、Thermo Protect Project に参加している。内容は暑熱環境、長波長から人体を守るための防護服はどのようなものがあるのか、どのようにしたら防護できるのか、それらに関連する事象を探るものである。

山下：専門は食品栄養学、肥満代謝と肥満のメカニズムで、主に、食品成分による肥満の予防と2型糖尿病と生活習慣病の予防、肥満と高脂血症の関係などである。

留学動機は糖質・脂質代謝制御について研究を行いたかった。岡山県立大学の海外研究制度を利用したが、これを用いる以上、一定期間留守をするための事前の周回の準備が必要であり、帰った後は、留学先での研究成果を報告する義務もあった。そこで、留学先で必ず研究ができることと、研究成果をまとめることができることが重要な選択基準であった。また、日本での指導教官の考えや結婚に伴う夫以外の多くの家族の理解を得る必要など、留学までに5年という年月を準備に要した。

留学先は、アメリカテキサス州ダラス、サウスウェスタンメディカルセンター、Dr. Uyedaラボ（日本人だがコミュニケーションはすべて英語）、日本での指導教官の知り合いでもあった。しかし、とにかく短い期間で成果をあげなければならなかったため、技術の習得のために行くのではなく、ある程度の技術を身につけた上で、現地では即研究に入ることができる体制を日本にいながらにして作っていく必要がある。自分で幾つかのラボを調べた後、伝手を頼って目的の研究ができる留学先を決めた。

しかし、実際、ラボで研究ができるかどうかは行って見ないとわからない場合も多い。

留学期間は助手5年後の1998/07から1999/10までで、在職しながらということもあり、助手の仕事について目途を立てながら、時には実習助手のために帰国することもあったという。留学先での成果をジャーナルに発表することができた。

黒川：専門は家族関係学。研究関心は、最近問題がさかんに言われている児童虐待やDV、子供の人権等の家族問題を含む家族関係全般。まあいわば、弱者から見た家族。また、家庭科教育の中で家族教育をどう行うかということも。まだまだ発展途上の学問である。留学の動機は家族について学びたかったというのが一番の理由で、また、アメリカに住んでみたかった。

留学先はアメリカ、インディアナ州立パーディー大学大学院に1990/08から1993/07まで。当時、高校教諭であったが、退職して留学することにした。フルブライト奨学金の大学院試験を受けたが、結果的にこれはダメだった。しかし、翌年のチャンスまで待つことはできなかったので私費で。一般の大学院試験を受験して留学したので、身分は学生であった。目標は修士号の取得。

アメリカの大学は出るのが大変とよく言われているが、成績、単位取得は本当にシビアで、実際に成績が悪く単位取得できなければ、来学期追放ということもありえる。勉強は本当に大変だったが、研究方法について詳しく、そして厳しく学べたことが、今とても役立っている。

都築：現在、産業技術総合研究所、人間福祉医工学研究部門に勤務。研究内容としては、温熱環境評価、対象は主に高齢者、子どもや住宅環境であり、ISO/JIS規格の制定などにも関与している。

学生時代から留学に興味があったが、ポスドク中に結婚し、すぐに妊娠したこともあり、叶わなかった。就職して3年たった頃、夫が留学を希望したことをきっかけに、西海岸カリフォルニア大学バークレー校に知人の研究者の紹介を受けて行くことになった。

国の機関に勤務していたこともあり、パートギャランティ制度（留学先から給与が支給され、なおかつ、日本での就職先の身分も保障される）という留学先の研究に参加する制度を使った。

研究は、当時、日本で温熱環境評価研究をしていたので、アメリカの多くの先行研究と、日本でとった自分のデータとの比較研究を希望したところ、人体の温熱モデルの開発に取り組むことになった。しかし、留学先にサーマルマネキンが導入されたので、これを用いたパーソナル空調評価を行ってはどうか、テーマが二転、三転したが、いろいろなことにチャレンジしてみよう、いろいろなアメリカの生活を見ようという気持ちで取り組んだ。

質疑応答から

都築：黒川先生からアメリカでの大学院は非常に厳しかったというお話があったが、この点についてもう少し詳

しく教えて欲しい。

黒川：今日のため、アメリカ院での自分のGraduate Manualを確認してきた。修士修了後、留学が終わって帰って来た当時、日本はバブルがはじけた後で、アメリカで学んできた専門をすぐに生かせる状況ではなかった。そこで日本の博士課程に進学することにしたので、日本の大学院の様子も知っている。

私を感じた最も大きな違いは、カリキュラムで、アメリカの大学院では、授業の半分以上が、リサーチに関する様々な授業で、理論、研究方法、統計のクラスなど。また、実際の現場で働く人に研究データがどう関わっているのかりサーチャーとワーカーとの橋渡しのクラスも受講させられた。

都築：授業のほとんどが、リサーチの仕方の基礎に関することだったそうだが、我々も論文に載っている統計手法や実験手法を参考に次の研究に役立てることがある。

黒川：とにかくたくさん論文、しかもジャーナルに発表されている専門的なものを読まされる。筆者が有名な人なのか、どんな人であるのか、論文の良し悪しなどもわからない状態で、それらの論文の改良すべき点を徹底的に洗い出す作業を、授業で、研究というもの自体がよくわからない段階からやらされた。これをこなすことで、ジャーナルによって優劣があることもわかってくるので、非常に勉強になった。

都築：現在、そのような体験が、大学教育に活かされていると思われる。アメリカで心理学の勉強をしてきた夫の状況に似ている。心理学はアメリカが進んでおり、黒川先生と同じように、研究の方法論もアメリカから取り入れている。家政学は幅広く、材料、人間、心理学、社会学、社会システムといったものまで含んでおり、これらが応用できる点が多い。もっと言えば、原点に立ち返るべきだといった意見もあるかと思う。大学院の中で、それらの方法を用いることはできるか。

黒川：もちろん取り入れたいという希望は多くあるが、アメリカの大学院の授業は半端じゃなく、とにかくジャーナルを読まされる。授業の予習として、ジャーナルの論文6~7本に加えてテキストの50ページ近く読んでいかなければ、授業についていられない。最低週に3つはそんな授業があるので、最初の頃は半分もわからなくて、パニック状態に近かった。それこそ、食べる、寝る、生理的欲求時間以外はいつもジャーナルを読んでいた気がする。あれほど勉強したことはないというくらいだった。

そのような方法を、日本に帰ってきて、日本の大学で同じようにできるかといえば、できるところはやりたいたいけれど、できていないというのが実情だろう。

都築：いいことがわかっていても、やはり広まっていくという方向には簡単にはいかないということか。

黒川：学部にしる、修士にしる、そういう方向で鍛えていこうという方針で、できればすごくいいことだ。

都築：山下先生は、成果が求められたということもあり、留学前5年間で十分に準備して成果を出された。それも一段階上の成果を最短で得て、戻っていらしたとのことだったが、留学先での研究の進め方についていかがか。

山下：論文を発表しなければならないという成果を求められる時、論文を書くために自分に何ができるのか考えると思うが、自分は特に上司の紹介で留学先が得られたのだが、研究の上ではやはりコミュニケーションが最も大事で、これは日本でも全く同じだ。日本人は英語ができないと難しい面もあると思うが、とにかくコミュニケーションをうまくとることが大事。一見成果とは無関係のようにも見えるが、ポストをとることはもちろんのこと、いろいろな人とうまくやるのが、研究を進める上で非常に大事だと思う。

都築：深沢さん、オランダではそのあたりどうか。

深沢：やはり海外（国内でも外）で研究をするにあたっては、良い環境でないと研究は進まない。山下先生と同じように、研究仲間とのコミュニケーションをよく保つことが大事だと思っている。どうしても自分で解決できないトラブルに直面することがある。自分でもトラブルを解決しようと試みるが、素直に周りの人に助けを求め、快く手を貸してもらえると、トラブルがすぐ解決する。研究活動もより順調に運ぶことができる。

現在、参加しているプロジェクトでも成果が求められる。同じプロジェクトに従事するパートナーと毎日コミュニケーションをとって、常にやるべきこと、研究についての結果や成果をディスカッションして確認していく。

都築：留学先をどうやって絞るか具体的に教えて欲しい、という質問が出ています。

黒川：フルブライト奨学金選考の面接で、希望する大学とやりたいこと（「家族」）を述べたら、面接官の先生から、あなたのやりたい専門だったらもっといい大学があると、3つくらいの大学を、逆に教えてもらった。その中からひとつを選び、調べてみると、実際、教官の数（スタッフ）も多く、その分野のいろんな専門について学べるのがわかった。結果的にはその時に教えてもらった大学に行った。

決めるにあたっては、法学やビジネス、自然科学系はランキングが出ているが、家政学系にはランキングがほとんどなく、どこかに聞けたらいいなと思った。自分で留学本にも当たったけれど、まずはアルクの会員になり、いざという時は聞けるという体制をとった。

山下：今はいろいろな情報をインターネットなどで得ることができる。しかし、その情報も過去の研究についての情報であって、現在、今後、その研究室で同じテーマを続けるのか見極める必要がある。既存論文から決めるだけでは不安があるので、いくつかの候補を選び、現地に行ってインタビューや、研究室のポスト話しをするのが一番いい。しかし、なかなか現地まで足を運べない。留学した先で、必ず思い描いた研究ができるかどうかはわからない、保証はできない。

深沢：関連する研究の論文から研究所を調べる。そして、自分が発表した論文を自分の留学候補の研究所に送り続けた。その時に必ず、現在、自分が取り組んでいる研究などや現在の状況を書き添える。ラッキーだったのは、その後、論文謹呈のお礼とともに、相手から現在の研究所での様子や状況が書かれた返事が来る。そして、もし、都合がよかったら一度見学に来ないかなどのメッセージがあった。当時、会社勤務で海外、特にヨーロッパなどへは時間的に無理だという状況を返事すると、相手から、日本で学会があって行くので、東京からは遠いかもしれないけれど、会いに来てくれないかといった返事が来る。そういったチャンスはなかなかないので、直接会って話しをする。すると、手紙ではわからなかった人柄などが見えてくる。一緒に研究がしたいと思える人に出会う。そういった人でないと、研究をしていくのは難しいと思う。研究者としても優秀だけれども、一人の人間としても信頼できる人だと思える人との出会いを自分から求めることも大事。

都築：私の場合は、家族があったので、最も行きたかったところには留学できず、家族そろって安全に暮らせるかどうかを優先した。そして、留学先には、自分の状況を話して、給料が支給されるかどうかや、子育ての支援体制（保育所や学校など）はどうなっているのか、住まいや大学との往復など生活に便利かどうかなど、家族の状況などを知らせ、情報交換をし、知るべきことを知った上で、研究に臨める環境かどうかを見極めた。

〔フロア質問〕横浜国大、薩本先生：山下先生が行くにあたって、準備を周到になさったということだが、自分も家族があり、子供がいればそれはそれでまた悩むことだと思う。上司や職場、家族の理解など、研究面の準備だけではない、いろいろな準備をどのようにしていったのか、具体的に教えて欲しい。

山下：当時、子供がいなかった点はその点はクリアされた。幸いにも夫も同じ分野の研究者であったので、1年位ならば、と了解を得たが、やはり家族よりも、職場の上司や職場内で折り合いをつけることの方が難しかった。大学勤務中の、海外研修という枠でだったため、授業の準備はもとより、帰ってきたときには絶対に成果が求められる。ただ行くだけではダメだという強い覚悟が必要だった。本務校での仕事は、他の助手などに頼めるものもあったが、実習などは、一種のパフォーマンスとして、帰ってきて行ったこともあった。そこまでしても留学して研究したいというアピールや成果を全面に出すことが必要。

都築：黒川先生は家庭科の先生を辞めて行った、とのことだったが、その辺のお話を伺いたい。

黒川：当時の専門は食物だったので、専門分野も変更した。家庭科教員の経験から、家族についての勉強や研究が非常に重要だと気づいた。日本での大学院も考えたが、それまでの専門分野と異なるので、受け入れてもらうまでに時間がかかる。また、当時、日本の大学院受験に際しては、2種の外国語が必要だったが、英語だけにかかる時間しかなかった。それならば、アメリカの大学で勉強した方がいいと考えた。

〔フロア質問〕長野県短大、前田：国内留学の話が聞けなかったが、どうしても日本ではなく、海外留学でないダメなのか。

山下：研究に関してだけなら、英語が理解でき、実験成果があげられたとしても、海外の様々な異国文化を理解しよう、知りたいという気持ちもなければ無理だと思う。

深沢：温熱関連の研究に関しては、日本でも施設や研究が盛んなので、日本でも充実できるだろうが、自分の興味対象とする研究は、特に、ヨーロッパが盛んであった。研究テーマによると思う。例えば、ヨーロッパでも入浴研究は盛んだが、入浴研究をするなら、ヨーロッパよりも日本の研究レベルの方が高く、入浴に対する需要も高いので、海外で行って研究を行う必要は薄れると思う。

〔フロア質問〕早稲田大学、西原先生：海外留学した際、これは相手に自慢できる、相手に影響を与えたことがあったら教えて欲しい。

黒川：学生活動でいろいろなイベントが企画して行われるのだが、例えば、「平和」に関するイベントの時は、広島原爆投下について書かれた詩を朗読したら、とても興味を持ってくれた。

都築：アメリカではいまだに、第二次世界大戦が終結したのは、原爆を投下したからだとか、昔、安いものの代表は日本製だと言われたこともある。時代的なものもあるが、今は、外国人自身が日本を旅行した際に、広島・長崎を見てきて、興味を抱いて、こちらに質問してくれることもある。平和の尊さみたいなものは、日本人だから話せるテーマでもあると思う。

黒川：影響を与えたかどうかはわからないが、高校教員をしていた時に国際理解教育というのが盛んになり、現職教育研修に参加した時に、姉の結婚式のスライドを作った。留学先の授業で発表機会があったので、この時のスライドを見せて日本の結婚式の様子を説明したら、これがすごく気に入ってもらえ、ほめられた。どういう形にしる、日本を紹介する、自分を紹介する準備をしていく必要がある。

都築：日本料理はうける。それまでほとんど作ったことが、祖母が作っていたのを思い出してみようみまねで、いなり寿司や太巻きを作ったら、次回からリクエストが来るくらい気に入ってもらえた。アメリカでは一品持ち寄りのpotluckパーティーが盛んなので、その時は必ずといっていいほど、太巻きをリクエストされるほど好評だった。

山下：期間が短かったということもあるが、研究室とアパートの往復以外、交流する機会はほとんどなかった。しかし、行った先の研究室に他にも日本人の留学生がいたが、皆、無口でコミュニケーションをとらないタイプだった。自分はおしゃべりで、明るい方なので、研究室の閉塞感を打破できたのではないかと思っている。

深沢：細かい実験装置を作るのが得意だったので、あれこれ頼まれた。手先が器用ということは得だった。装置の取り扱いもわりあいすぐにマスターできる。また、近所の子供や職場の方の子供とのふれあいができた。日本から持っていったお菓子をあげたり、料理を作ってあげたりした。そうしたことを通じ、今度は向こうから自宅に招いてくれたりした。

オランダには日本の間違った情報がいっぱい伝わっている。例えば、いまだに着物にちょんまげ姿だと思いい込んでいる人も多いが、オランダ人と全く同じような服を着て、生活していることを話してあげる。間違った情報を多少は修正できているのではないか。

〔フロア質問〕東京家政大学、土居先生：海外留学では必ず英語力が必要だが、その習得方法と、病気やケガなど緊急時に対応できる医療についてどのような準備をしたか。

黒川：留学生は必ず保険に入ることになっている。何か病気になる、大学の付属病院に行くことができた。勉強法は、まずは、聞き取れないと、話せない。聞く力に関しては、集中的に聞く期間が必要。英語力はけっして正比例的に伸びていかない。階段状だと思う。あるときある段階までスッとわかるようになって、段々その壁が高くなっていく。読む能力は、初めは童話など、1頁に2、3個わからない単語が出てくるような本を、辞書を引かないで、量をたくさん読んでいった。そして話す能力は、自分の話している英語を録音して直していった。英語で日記をつけた時期もある。ありとあらゆることをやっているとっていいと思う。英語で話すにしる、日本語で話すにしる、同じ頭で考えることなので、外国語で母国語（日本語）以上の思考はできない。だから、日本語で考える力、論理的思考、日本語の文章能力を養っていくことも必要で、その意味では英文法も役に立つと思う。

都築：保険は、海外旅行などの期間が短い時も入って行くと思うが、長期でビザを発行となると、必ず向こうから要求される。働くとなると必ず保険に加入する必要がある。毎月150ドル（約1万5000円）給与から天引きされていた。保険会社が経営していた病院で支払うのは、診療の度に1ドルなので、出産の時も陣痛

が始まって1ドル札を握っていったが、この時ばかりは向こうから請求されなかったので、ただで産んでしまった(笑)

英会話については、向こうで研究をリタイアされた方がボランティアで週1、2回英語を教えてくれた。日常慣用表現だけでなく、生活上の相談にもものって下さった。アメリカは移民国家なので、英語の勉強に関しては、アダルトスクールやYWCAを利用することができ、ちょっと探せばいろいろある。日本にいる時から手配することも可能だと思う。

深沢：オランダの状況は、研究所の中は、他の留学生もいるので英語で通じるが、日常生活ではオランダ語なので、買物などに必要な言葉は勉強する必要があった。

都築：<終了時間が近づいたので>多くの方にご参加いただいて、ありがとうございました。今回のディスカッションが少しでもお役に立てば幸い。今後、皆さんの留学の契機になればいいと思う。以上。